

## 学部アンケートに対する見解

平成 14 年 5 月

ネットワーク情報学部

ネットワーク情報学部では、昨年 12 月に在学生に対するアンケート調査を行い、多くの諸君から回答を得た。アンケート結果については、適切な形にまとめ上げた上で、教授会の場において学部所属学部の全教員に閲覧してもらい意見を文書で提出してもらった。学部としては、このアンケートの結果を踏まえ、改善すべき点については改善するとともに、学部としての考え方をさまざまな機会を通じて、学生諸君に説明して行きたいと考えている。以下では、アンケートの各項目について簡単に学部の見解を述べる。

### (1) 「ネットワーク情報学部に入學して満足しているポイントがありますか」

もっとも多かった回答は、「PC の操作および関連知識が増えた」というものであって、IS コース志願者の 60%以上、CD コース志願者の 50%以上のものがそう回答していた。しかしながら、NS コースの志願者でこう回答した者は 20%強に過ぎず、コースによる偏りも少なくない。NS コースの志願者では、「専門知識が増えた」という回答が最も多かった。これは、各コース志願者のコンピュータに関する経験と志向によるところが大きいと考えられる。すなわち、NS コース志願者の多くは、すでにパソコンに関する経験のある程度有しており、むしろさらに上の知識を求める傾向が強いのであろう。一方、IS や CD コースの志願者については、大学で初めて PC に本格的に取り組む者も少なくなく、PC の知識そのものが重要に感じられたのであろう。本学部では、入学前に PC に関する経験を仮定していないために、PC の未経験者にとっては関連分野の難易度が高く感じられる反面、経験者にとってはむしろ退屈に感じられる部分もあると思われる。PC 関連の授業レベルをどのように設定すべきかについては、今後とも検討していく必要があると考えている。

### (2) 「ネットワーク情報学部に入學して戸惑いを覚えたことがありますか」

コースを問わず、50%程度の学生が、「授業の難易度が高い。数学のレベルが高い。」との回答を寄せている。しかしながら、10%を超える学生が、「もっと高度な授業を。」と望んでいることも事実なのである。難易度が高いと回答する学生の多くは、「数学のレベルが高く、数学 や C の知識がないと付いて行けない。」などと答えているが、これは全くの誤解である。もっとも数学に近いと考えられる「数的推理」で扱っている内容についても、基本的な数的概念についての理解を促すものであり、特定の高等学校の教科内容を前提としたものではない。従って、数学 や C を履修したからと言って、そのことが理解のプラスにな

るものではない。「数的推理」以外の科目においても、数学的内容が取り扱われることがあるが、それらの内容についても、数学 や A について理解していれば充分であり、これらの科目は、すべての諸君が履修したはずである。我々が問題であると考えるのは、ちょっと考えて理解できない内容に出会ったときに、自ら諦めてしまう態度である。特に、一部の学生に、数式を見ただけで嫌気がさしてしまう数学アレルギーとでも言われる症状が見られるのは残念である。ネットワーク情報学部では、コンピュータを扱っている。コンピュータの世界は数学とは異なるが、どちらもきちんとした論理の上に築かれていることは同じである。今の段階で必要とされるのは、与えられた問題の正解を出すことではない。自らの頭を使って懸命に考えることなのだ。それを続けているうちに、必ず論理的な考え方というものに身に付くはずである。

(3) 「役に立った、又はタメになった授業はありますか。」

最も多くの回答を得たのは、「情報リテラシー演習」であったが、(1)で述べたことと同じ理由から、IS の 50%超、CD の 40%超に対して、NS では 20%程度に過ぎなかった。NS の諸君で最も多かったのは、「プログラミング入門」「プログラミング演習」で 40%近くの学生がそう答えていたが、IS、CD については 20%弱に過ぎなかった。この両者に共通するのは、実習に関連する科目ということで、学生諸君が実習を好んでいることは、良い傾向であると考えている。しかし、同時に実習という形態が、必ずしも効率の良い学習方法ではないことも理解しておいて欲しい。すなわち、リテラシーにしても、プログラミングにしても、各人には歴然とした能力差があり、それらが一同に会して同じ内容に同じ時間取り組むことには無理があるからである。実習の時間というのは、あくまでも、勉強の一つのきっかけとして欲しい。プログラミングが得意なものは、積極的により上級の問題に取り組んで欲しいし、苦手なものは、時間外に自主的に練習を繰り返して欲しい。ゆめゆめ、実習の時間だけで、コンピュータに習熟できるとは考えないで欲しい。

(4) 「ネットワーク情報学部に入学してから授業時間以外にどれくらい勉強していますか。」

勉強時間については、各コースともに平均して週 10 時間程度であった。また、週 5 時間以内と答えた者が、すべてのコースにおいて 20%を超えており、信じ難い状況と言ってもよい。文部科学省の大学設置基準によれば、学生は講義時間の 2 倍の自習をしなければならないことになっている。この基準に従えば、すべての学生は授業以外に毎週 30 時間は勉強しなくてはならないのである。30 時間が厳しいとしても、せめて平均 20 時間、最低でも 10 時間程度は勉強して欲しい。その上で、授業の難度が高いとか、宿題が多いとか、好きなことをやる時間がないとか言われるのなら、学部としても対応策を考えざるを得ないが、この状況では、そのような言葉は単なる甘えとしか受け取れない。この点については、学生諸君の猛省を促したい。

(5)「先生方に何かリクエストはありますか。」

コースを問わず約半数の学生が、「複数のレポートが重なると大変なので、総量はともかく時期について配慮して欲しい。」という回答を寄せている。この問題提起については、学部としても真剣に受け止め、課題の提出状況を教員間で共有するなどの対策を取る方向で検討している。その他に、情報リテラシーのような多展開科目の講義内容について、より統一感を持たせて欲しいとの要望も強かったが、この点についても、担当者間の連絡を密にするなどして、可能な限り対応して行きたい。また、授業そのものについても、「ゆっくり話して欲しい」、「字をきれいに書いて欲しい」、「専門用語を使うときはきちんと解説して欲しい」などさまざまなリクエストを受けたが、これらについては、各教員個々人がさらなる努力をして行きたいと考えている。しかしながら、たとえば、「早口で話す」「つい専門用語を使ってしまう」などは、一種の癖でもあるので、つい無意識のうちに行ってしまうがちの行動である。「話が聞き取れない」、「専門用語がわからない」などのときには、その場で積極的にリクエストを出してもらって構わない。

(6)「施設に対する感想や意見はありますか。」

コースを問わず、70%程度の学生が、端末室について触れていた。現状に関して、それなりに肯定的な意見も少なくないものの、「レポート提出の時期には端末が不足する」、「メンテナンスが行き届いていない」、「上級生になったときの不足が不安」などの意見も少なくなかった。これらの問題については、学部の決定だけで改善できるものではないが、学部としても、学長を始め関係諸機関に、学生諸君の要望を伝え、積極的に対処していく所存である。

(7)「ネットワーク情報学部に入学した自分の選択は正しかったと思っていますか。」

ほとんどの学生は、まだコースに分かれていない現状では、わからないと答えている。この回答は至極妥当だと思われるが、大学の価値というものは、卒業して10年、20年を経て定まってくるものである。大学時代は、あくまでも長い人生の助走期間に過ぎない。仮に今満足していても、10年後に失敗だったと思ったとしたら、それはやはり失敗なのだ。かつては、大学に何も求めず、学生は入社させてから教育すれば良いと考えている企業も少なくなかった。しかし、そういう時代が終わりを告げたのは言うまでもない。今は、大学で何を学んだか、何を身に付けたかが、問われる時代だ。そういう時代に大学生活を送る諸君の、将来的な満足度を高めるためには、本当の実力を身に付けてもらうことしかないと我々は考えている。そのためには、授業も厳しいし、課題も出す。しかし、10年後、20年後に必ず、努力したことが報われるときが来るはずである。

(8)「自由記述」

ここでは、詳しく述べないが、さまざまな意見を得た。教員の立場から見ると、その意

に添うことが諸君のためにならないと思われる意見もあったが、傾聴に値するものも少なくなかった。たとえば、「理系なのか文系なのかはっきりさせて欲しい。」との声があったが、次代を担う若者が世間の古い風潮に流されていることは残念な限りである。情報は、理系、文系という枠組みを超越した新しい学問体系であり、そのようなものに束縛されることには意味がない。自らを情報系と称して誇りを持って欲しい。一方、「ビデオオンデマンドを自宅から視聴できるようにして欲しい。」との意見もあった。コンテンツの保護の観点から現状ではアクセス制限をかけているが、認証システムを導入しできるだけ早期に対応したいと考えている。